

1 日目：大槌町での講演、被災地状況視察、交流活動

1 日目は、東京から5時間以上かけて岩手県大槌町に到着。被災自治体の中でも特に大きな人的被害を受けた同町の被災状況を、前町長の講演と、町内を巡る語り部バスでたどっていきます。実際の場所で当事者のお話を伺うという初めての経験に緊張した面持ちで臨む参加者たちは、これから4日間の宿泊研修のスタートを実感していました。

防災士養成講座 [6]

大槌町文化交流センター「おしゃっち」

「行政の災害対応」

講師／前大槌町長 いかりがわ 碓川 豊氏

大槌町では、東日本大震災の津波と火災、そして関連死によって、町民の8.2%にあたる1,286名が犠牲となりました。人口比としては、岩手県内で最多です。災害対策本部を設けた町庁舎でも、当時の町長をはじめ職員約40名が津波により死亡しました。行政機能はまひし、被災自治体で唯一、避難勧告・指示を発令できず、住民の被害拡大につながりました。

震災後4年に渡り、町政のかじ取りを担ってきた碓川氏は、行政責任は重大だったと当時を振り返り、本来果たされるべきだった行政の役割や、困難を極めた復興への道のりを、一つ一つひも解きます。

一度、災害が起これば、行政は大混乱の中で、炊き出し、災害医療、遺体安置、仮設住宅と、あらゆる対応を迫られます。まず大切なのは、平常時の防災と危機管理です。災害リスクの確認、資機材の準備、他自治体との災害協定など多角的な連携など、多岐にわたる備えがあってはじめて、災害時に機能します。

復興に当たっても、課題は山積していました。税などの記録も全て流失し、資材も人材も不足していました。入札はほとんどが辞退され、仮設住宅の土地を確保しようにも所有者不明で進捗しません。高齢者が多くを占める被災者には、慣れない避難生活で認知症の発症が増え、その対応も求められました。生き残った100名余の町職員の半数は、過酷な業務が影響して心のケアを必要とする状態に陥り、全国から派遣された応援の職員の力が助けになりました。

文字どおりゼロからのまちづくりでした。中でも鍵は、情報の共有です。国・県や他自治体との連携はもちろんのこと、復興の過程を住民と情報共有し、理解し、認め合うことが大切です。

地方自治の本質とは「自ら考え、自ら責任をもって行動すること。」だと碓川氏は語ります。エンジンは住民という言葉のとおり、復興に向けても住民参加は欠かせません。震災後、町内の各地区では自主防災の取組も進みました。郷土芸能や助け合いの精神「結い、でつながったきずながあってこそ、住民総出の活動です。

さらに、元に戻すことが復興ではないと強調します。それにとどまらず、まちも人も再生を目指そうということです。復興は未来への贈り物、防災を文化としたまちづくりという言葉も印象的でした。甚大な被害の要因の一つが、過去の津波経験の風化です。暮らしの中に防災教育を根づかせることで、必ず再びやってくる津波から、人命を守ろうというものです。教訓を未来へ伝える責任、未来責任という言葉で、参加者たちは自分ごととしてしっかり受け止めていました。



防災士養成講座[6] 語り部バス（大槌町）

大槌町文化交流センター「おしゃっち」⇒大槌町旧役場庁舎⇒大槌港

講師／一般社団法人おらが大槌夢広場 代表 神谷 未生氏、川端 喜久子氏、赤崎 幾也氏

講演の後は、大槌町の震災関連施設を、語り部の皆さんに案内していただきました。

ツアーは3グループに分かれ、おしゃっちのロビーに設置された大槌町のジオラマからスタートしました。震災前の写真をもとに、町の人々が記憶をたどって家並みを再現し、住民の名前を記したもので、かつてのにぎわいがしのべられます。家も家族も失い、このジオラマの中の建物だけが家族の生きた証だという人もいと聞き、参加者たちは、その重みをかみしめていました。

続いて、すぐ隣の大槌町旧役場庁舎へ向かいます。当時の町長をはじめ約40名の職員が津波の犠牲になった場所です。休止中の解体工場の足場が組まれた庁舎前に

は、住民の手で献花台が設置されており、参加者たちは代表者が花を捧げた後、全員で黙とうしました。

行政のトップが被災・死亡したのは、大槌町だけです。この惨事を語り継ぐ必要性は、町の人々も強く感じています。旧庁舎の保存を巡っては、町内でも意見が二分しています。建物を見るだけで体が固まる、心が壊れると、解体を望む人も大勢います。無残な姿の旧庁舎と、きれいに掃除され、千羽鶴や多くの供物に囲まれた献花台を前に、正解のない選択を迫られる町の人々の苦渋を思い、自分ならどうするか、参加者たちは真剣な面持ちで考えていました。

最後の目的地である大槌港に向かう道路には、復興資材を運搬するトラックが多く行き交い、砂ほこりが舞っていました。震災から7年半を経ても、復興はいまだ道半ばという様子です。港からは新旧の防潮堤が一望でき、付近には水産加工場が建ち並びます。興味深かったのは、水産業者には、ほとんど犠牲者が出なかったという話です。海のそばで働く人の危機感、海が直接見えない地域の住民とは違ったのではないかと思います。

語り部の神谷氏が「あなたが逃げない限り、人は助けられない。この研修で、その覚悟を確かなものにしてほしい。」と、何度も語り掛けていた姿が印象的でした。



宿泊ホテル総支配人の講演

「津波被害からホテル再開までの道のり」

宿泊研修初日の夜は、参加者が4日間お世話になる三陸花ホテルはまぎくの総支配人立花氏に、お話を伺いました。

三陸屈指の景勝地である浪板海岸に建つ観光の拠点だった同ホテルには、地震当日、高齢者50数名の宿泊客が、東京から招いた劇団の公演を楽しんでいました。経験したことのない大きな揺れに驚いたものの、当時は防災意識もさほど高くなく、大津波は誰の念頭にもありませんでした。それでも念のためと避難を開始し、津波の第一波が襲来したのは、お客様を誘導して坂道を上がっている、ぎりぎりのタイミングでした。

「お客様の命をお預かりするという、最低限の責務は何とか果たせた。もし一人でも犠牲者が出ていたらホテル再建は絶対になかった。」と立花氏は振り返ります。

一方、社長や女将など従業員5名が死亡しました。無事だった従業員もほとんどが家や身内を失い、ホテルは営業停止を余儀なくされました。

数日後、立花氏たちは建物の瓦れきを片付け始めました。再建などは思いもよらず、行方不明の社長を探したい一心でした。そこへリュックを背負った人がぼつぼつと現れ、手伝い始めます。全国からのボランティアでした。「ありがたかった、その反面つらく申し訳なくもあった。」と言います。「再開したら泊まりにきます。頑張ってください。」と汗を流してくれた、延べ500人もの彼らに対し、再建の気力はなかった当時の立花氏たちは、期待に応えられなかったら……と心苦しく思っていたようです。



講師／三陸花ホテルはまぎく 総支配人 立花 和夫氏

しかしその期待が、背中を押してくれました。国立公園内の建設に必要な環境庁の認可、取り合いになっている建設会社の確保、莫大な資金の工面など再建に向け山積する課題を乗り越えていきます。



そのような中、ふと思い出したのは洪菊でした。震災前に天皇皇后両陛下が宿泊なさった折、亡き社長の案内でホテル前の浪板海岸を御散策された時に、皇后陛下が御覧になられた白い花です。その時お送りした種は、御所で見事な花を咲かせているようです。花言葉は、逆境に立ち向かう — ホテルのみならず、地域全体にぴったりということで、シンボルとして励みにしました。

地震から2年を経て再建し、さらにその3年後には、両陛下に再び御宿泊いただけるまでになりました。

再建当時、地元では「観光、という言葉自体が禁句であったそうです。生活もままならぬ中、それどころではない雰囲気でした。しかし今では「人口減の中、全国から人に来てもらわなければ地域の再生はない。」と、大切な産業として捉えられるようになりました。町に住宅も建ち並び始め、隣接市では鉄道の再開、ラグビーの国際大会開催と、町の未来も少しずつ見えてきた感じがします。

今、ホテルや周辺企業では、地元の若者を積極的に採用しています。子供の頃に震災を体験し、再建に向けて奮闘する大人の姿を見て育ち、自分も親の、そして地域復興の役に立ちたい、と地元に残ってくれた若者たちです。その若い力をいとおしくも頼もしくも思う、という立花氏の言葉に、これから巡る三陸の町々への期待、そして真摯に向き合う覚悟を新たにしている参加者たちの姿がありました。

参加者の感想（宿泊研修 1 日目）

●防災士養成講座 [6] 行政の災害対応

情報の的確な伝達ができず、「防潮堤があるから大丈夫」、「自分は大丈夫」という人間のもつ正常性バイアスが働いたことが、町に多くの犠牲者を生んだ要因ということを理解した。	生徒
判断ミスにより町役場の職員が亡くなってしまったことを聞き、心が痛んだ。結果論でしかないが、もしあの時、判断を間違えずに災害対策本部を違う場所に設置していたらと考えてしまう。	生徒
経験者が語る「防災行動は失敗してもよい、ただし、何もしないのはNGである。」という主張に説得力があった。	教員
想定外を想定することの難しさを感じた。避難訓練では指示を聞いて動くだけでなく、様々な場面を想定して行うことが重要であると学んだ。	教員

●語り部バス 大槌町 被災地状況視察

高齢者の避難の難しさを知り、足元にライトを取り付ける、手すりを取り付ける、連絡方法を考えるなど、自身の祖母の避難をしっかりと考えようと思った。	生徒
災害がいつ起こっても対処できるように、町内会や学校等で防災訓練や地域の行事等で住民同士の顔を知っておきたい。	生徒
高校生が自ら頼まれずに動いていたという話に驚いた。自分が同じ状況に立たされた時、行動できるかどうか考えると不安である。この不安は、宿泊研修で様々な体験をして、自信に変えたい。	生徒
大槌町旧役場庁舎の曲がった鉄骨、ガラスのない窓枠、破壊された壁、その全てが津波の恐ろしさを物語っていた。	生徒
語り部の方は、「今までよりも高い防潮堤を作るべく毎日工事が行われているが、大切なのは津波を防げるようにすることではなく津波から避難し命を守ること。」と語っていた。施設が整うことで、高い防潮堤に安心して防災意識が欠けてしまう危険性もあることを知った。	生徒

●宿泊ホテル総支配人の講演

ホテルスタッフの行動の様に、冷静に先のことを考え、思い切って決断し、行動できるようにしたいと思う。	生徒
総支配人の話によると、人と人とのつながりでホテルが復旧したということである。そのホテルに泊まれることは感銘深いものであった。	生徒
ホテルに滞在している時に地震に遭った客もいたという話を聞いて、家にいる時、学校にいる時といった場面だけで災害に遭遇することを想定するのではなく、電車に乗車している時、外出先にいる時などより多くの場面を想定しておかなければならないと思った。	生徒
客は全員助かったが、社長ら数人が亡くなった。今、災害が起こった時に、どうすべきか、生徒をどう守るか、どのような指示を出すか、次何をするか考えておくことの重要性を改めて感じた。	教員
ホテルでは、決断が5分遅れていたら客に犠牲者が出ていた可能性があったようである。避難させる決断、ホテルを再開させる決断など「決断」を下すことの難しさ大切さは、学校でも同じことが当てはまる。	教員